

ヨハネによる福音書 20 章 11 節－18 節
「私は主を見ました」

《1》

週の初めの日の朝早く、マグダラのマリアはイエスさまの墓に行きました。そして、そこで見たのは空になっている墓です。主は取り去られてしまったものと思い、彼女は急いで弟子のペトロとヨハネのもとへと走って行き、事情を伝えます。

話を聞いた二人は墓に走って行きましたが、やはりそこで見たのは、イエスさまの遺体を包んでいた亜麻布だけでした。

二人は、恐らくしょんぼりと家に帰って行きました。イエスさまが必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、まだ理解していなかったからです。

今朝はその続きです。マリアは二人の弟子に知らせた後、自分もまた墓に戻って来ていました。そして二人の弟子たちは帰って行きましたが、彼女は墓の外に立ち尽くします、それも泣きながら。

彼女も、ペトロたちと同じように、地上の歩みをされたイエスさまに、ずっと従ってきました。

ルカによる福音書 8 章 2 節には「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」とあります。ほかの女性たちの名前も挙げられていますが、そこには、彼女たちがイエスさまと一緒に旅を続けられたこと、そして、「自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」ということが記されています。

さらに、一つ前の 7 章には、いわゆる罪深い女の出来事が記されています。あるファリサイ派の人の家でイエスさまが彼らと一緒に食事をされていたとき、一人の罪深い女が香油の入った石膏の壺を持ってやって来て、イエスさまの足を髪でぬぐい、香油を塗ったという出来事です。

この女性は無名であって、誰なのか正確なところはわからないのですが、これはマグダラのマリアである、という考えが古くから教会にはあります。

これが事実かどうかは別にしても、彼女はずっとイエスさまと親しく数年の月日を過ごしてきました。それを想い起こしては、涙が止まらなかったのでしょう。

やがて彼女は身をかがめて墓の中を覗き込みます。

するとそこに、白い衣を着た二人の天使が見えた。マリアは恐らく、それが天使だとわかったのでしょう。

天使であるならば、この驚くべき出来事は、決して悪いことではなくて、よいことなのではないか。——そう推測する余地もあったはずですが、マリアには少しもそのような余裕はありませんでした。

「婦人よ、なぜ泣いているのか」と問いかけた天使に向かい、彼女は、ペトロたちにも告げたことと同じようなこと、つまり今の彼女の心を完全に占領してしまっている悲しみ、戸惑い、不安をそのままにぶつけます。

「私の主が取り去られました。どこに置かれているのか、私にはわかりません」。

そして、こう言いながら、マリアは振り向いた、とあります。物音がしたのか、何らかの人がいるような気配がしたのでしょうか。

それはイエスさまですが、マリアにはわかりません。「婦人よ、なぜ泣いているのか。誰を捜しているのか」との声に対し、マリアは園丁だと思い、答えます。

「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私があの方を引き取ります」。

この後、マリアはまた顔を墓のほうへと戻したようです。イエスさまが「マリア」と言われると、彼女は振り向いた、とありますから。

イエスさまは、マリアの質問に対して、すぐには答えられなかったのでしょうか。イエスさまをどこに置いたのですか、という質問です。

もしそうだとすると、これは私の勝手な推測ですが、イエスさまはマリアとの遣り取りを楽しんでおられたのではないのでしょうか。少し、焦らすようにして、また微笑みをこらえるようにして、マリアを見つめておられたのでしょうか。マリアよ、私からわからないのか…。

そんなイエスさまから（マリアはイエスさまだとは思っていないわけですが）、答えを得るのは難しいと考えて、マリアはまた墓のほうを向いてしまった、ということになるでしょう。

これもさらに推測ですが、きっと一緒に旅を続けておられたとき、イエスさまとマリアは、時には、まったく悪意のない冗談や軽口を言って、その遣り取りを楽しむようなこともあったのではないのでしょうか。

それで今回も、イエスさまはマリアを少し焦らされていたのかもしれませんが。そして、そろそろ潮時だな、と思われたのでしょうか。マリアに向かって、「マリア」と呼びかけられました。

この声で、マリアはすべてがわかりました。この御方はイエスさまに他ならない。

ヘブライ語で「ラボニ」と彼女は答えています。正確にはヘブライ語とよく似た言語であるアラム語のようですが、意味は、先生・教師です。

最初の、なぜ泣いているのか、という問いかけの時には、マリアはわかりませんでした。しかし、親しく「マリア」と呼びかけてくださったその声で、今までに何度も聞いたことのあるイエスさまの御声であることがわかったのです。

《2》

イエスさまにすがりつくマリアに対して、主は言われました。「私にすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから」。

なぜ、すがりつくな、と言われたのでしょうか。すがりつく、というのは、体に触れることですね。後に、疑うトマスに対して、イエスさまは、あなたの手を伸ばし私の脇腹に入れなさい、と言われていました。

トマスに対しては、触れなさい、と言われ、マリアに対しては、触れるなと言われている。どこに違いがあるのか、ということでもあります。

それで、マリアに対してすがりつくなと言われた理由として、一つにはこういう考

え方もあります。この後、マリアに対して、弟子たちのところへ行って、これこれのことを言いなさいと主は言われています。

すぐにもそのことをしてほしいから、すがりついている時間などない。急いで行きなさい、と言われていたのだ、という理解です。面白いですが、あまり説得力はないように感じます。なぜなら、すがりつくと言われることの理由は、その直後に言われています。イエスさまはまだ父のもとへ上っていないからだ、ということですね。

この理由は、マリアにとっても、またすべての信仰者にとっても必要なことは何なのか、ということから考えたらよいでしょう。

復活の主にすがりつく、——そのようにして復活がいつまでも続くことを願うのが、よいことなのでしょうか。復活は素晴らしい出来事ですが、これで救いの御業がすべて終わるものではありません。

イエスさまは、十字架に懸かれる前に、弟子たちに何を語られ、どのようにして彼らを励まされたのでしょうか。それは、何よりも聖霊降臨の出来事をもって、励まされたということでしょう。

13章から続く、弟子たちに語られたイエスさまの長いお話がありますが、その中の14章18節で、主は言われています。「私はあなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」。

復活されたまま、いつまでもその御姿であなたたちと共にいるから、あなたたちがみなしごになることはない、と言われたのではないですね。

聖霊において(主イエス・キリストの聖霊において)、主があなたがたのところに戻られるから、だから、みなしごにはならないのだ、ということです。

復活されたイエスさまにすがりつくのは、このままの状態がずっと続けばよいとすることであって、聖霊降臨のことは眼中にないということに、形としては、結果的に、そうなってしまいます。

そうではなく、主が聖霊において再び来てくださることを待ち望み、そのための備えをすること。それが、今のこの時なのだと、主は言われるわけですね。

一方、トマスの場合は、復活されたイエスさまのことを彼が頭から信じようとはしないので、確かに主イエス・キリストが復活されたのだということを、証拠をもってきちんと確認させようとされているわけです。事情が違います。

私にすがりつくことではなく、あなたには今、すべきことがある。私の兄弟たち(弟子たちのことを、こう呼ばれています)、彼らのところへ行って、こう言いなさい。

「私の父であり、あなたがたの父である方、また私の神であり、あなたがたの神である方のところへ私は上る、と」。

父なる神さまのもとへと、主は上られる。このことを告げなさい、と主は言われました。これによって、先ほども述べたことですが、そこから主イエス・キリストが御霊において、再び来てくださるからです。それを待ち望みなさい、ということです。

ただ、ここで、父なる神さまのことを言われるのに、とても多くの言葉を費やされています。私の父であり、あなたがたの父である方、また私の神であり、あなたがた

の神である方。

もっと簡単に、弟子たちを含めて「私たち」ということにして、「私たちの父である方、私たちの神である方」と言われてもよさそうに感じるかもしれない。

しかし、そうは言えないのですね。それは、本質的なところで、神さまに対する関係が、イエスさまと私たちでは違うからです。

イエスさまにとって、父なる神さまが父であるのは、本質において同じ父と子の関係があるということです。しかし、私たちは人間ですから、父と本質は違います。主イエス・キリストにあって、父と子であるとされています。

「神」ということでも、父なる神さまとイエスさまとでは、三位一体の神として同じ神ですが、私たちがそうでないのは言うまでもありません。

それで、多くの言葉で、別々に言っているのですが、しかし、ここで主が何よりも強調されているのは、そのような区別性ではなく、連帯性ではないでしょうか。

父なる神さまのもとにあって、主イエス・キリストと私たちとは、一つとされている。だから、恐れずに、絶えず共にいてくださる主にあって、主にすべてのことで抛り頼み、勇気をもって、希望を抱いて、歩み続けていこう！

《3》

マリアはすぐに弟子たちのところへ行き、このことを伝えました。

同時に彼女は言っています。「私は主を見ました」。喜びに溢れて、こう告げたことでしょう。

こうしてマリアは、いわば復活の主を宣べ伝える最初の伝道者となった、と言ってよいでしょう。

復活の主を見た。主にお会いした。これが彼女の力と希望と喜びの源です。

人生は出会いが大切だ、人生において誰に出会うか、これが決定的だ。このように、誰もが言います。

そのとおりでしょう。そして、主イエス・キリストにお会いする。主を見る。これこそが、決定的なことです。

既に主にお会いした私たちは、常にこの主にとどまり、御言葉と御霊に導かれ、励まされて、これからも着実に、歩み続けていきましょう。

まだ、主にお会いしていない方々は、ぜひこの主に出会い、新たな命の恵みに生かされるようにと、お祈りします。

主は絶えず、私たちに呼びかけてくださっています。ヨハネの黙示録 3 章 20 節。

「見よ、私は戸口に立って叩いている。誰か私の声を聞いて戸を開ける者があれば、私は中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた私と共に食事をするであろう」。

2021年6月27日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

死から命へと復活された主イエス・キリストは、親しくマリアに現れてくださいま

した。

そして主は、今、主イエス・キリストの御霊である聖霊において、主を信じ、主に
抛り頼む全ての者と共にいてくださり、御言葉をもって私たちを常に励まし、導いて
くださいます。恵みを覚えて感謝いたします。

どうか、この恵みのうちに、私たちいつまでも堅く留まり、どこまでも主につなが
っている者として、恵みと喜びを証しする者とさせてください。

また、これからも、さらに多くの方々が主と出会い、主にあって新たな希望と喜び
を知り、確かな生きる道を見出されますように。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司